

ニッポン

ドクター和の

# 臨終回巻



憧れの人でした。氏名の前に「男」とつけるのがこれほど似合う人はもう現れないでしょう。男・星野仙一が、流星が燃え尽きるごとく真冬の空に消えました。

星野さんの魅力の原点をいくつか探してみました。父親が不だつたこと。地元愛が強すぎたこと。そして大の負け嫌い。そんな星野さんはごく近しい人にしか、がんであることを見かきないまま70歳で逝きました。

星野（すいせい）さんと診断されたのは2016年の夏。急性膵炎が発覚しました。膵臓は胃の後ろ側にあるタラコのような形をした

長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

## 38 星野仙一



臓器。血糖を下げるインスリンを分泌とともに食べ物の消化に必要な酵素を分泌するといふ2つの大切な役割を担いながらも目立たない、しかし重要な臓器です。

膵がんは、ほとんど無症状なため早期発見が困難なんです。星野さんのように腹痛を伴う急性膵炎をきっかけにして発見されたときは、かなり進行した状態であることが多いのです。

星野さんも余命3カ月を宣告されながら、1年半近く活躍されました。死の1カ月前の昨年12月1日にはかなり痩せられていたようですが、大阪で行われた野球殿堂入りを祝う会に顔を見せていました。この正月は、娘さん夫

好きな言葉は「夢」でした。「いつも夢にチャレンジしているから、オレはすごく若いのだ」とよく話していたとか。若く熱かった勇姿に、負けず嫌いの男のロマンをたくさん見させていただきました。

大相撲の九重親方（元横綱・千代の富士）やジャーナリストの竹田圭吾さんも膵がんでした。星野さんは発覚時に余命3カ月と告げられ、手術はできなかつたようです。膵がんへの抗がん剤は効果がある薬が開発され、余命数カ月といわれながらも年単位で元気に活躍されている人を散見します。もはや膵がん＝絶望とはいえない時代になりました。

星野らしいエピソードですよ。モルヒネも最期まで拒否していました。がんの痛みを抑えるモルヒネは決して怖い薬ではなく、いまや緩和ケアに必須です。我慢せず使ってほしかったとも思います。これがまた男。星野らしいエピソードですね。

しかし、その翌朝に容体が急変。娘さんの腕に抱かれながら、やすらかに旅立ちました。男の人生を闘い抜いた先に「平穏死」されたのです。

# 闘い抜いた男の平穏死